人のいる風景

佐々木 保彦さん

【ささき　やすひこ　さん】 64歳　柏陽

●千歳写友会の代表を務める

写真は、過去の映像を今に伝える言葉のない情報

「写真は、言葉で表すことがむずかしいことを表現できるもの」と話すのは「千歳写友会」で代表を務めている佐々木さん。

「写真を始めたきっかけは父の影響が大きく、小さい頃に父がドイツ製の蛇腹式カメラを持って、よく家族を撮影していたことを覚えている」と記憶をたどる。

佐々木さんが写真と出会ったのは高校2年のとき。「父がお前も写真を始めてみないかと言って、35㎜カメラを貸してくれたのがきっかけ」と話す。

「始めた頃は何も分からず、無作法に撮影していた」と言い、「学生の頃から顔写真が多かったが、風景写真も好きなので、支笏湖やニセコ、積丹、留萌方面などに行くときは、必ずカメラを持参していた」。

「撮影は未熟なものでしたが、父から習って、モノクロ写真は自分で現像していた」と言う。

それから47年が経ち、父が貸してくれたカメラは今も大切に保管してあり、時々、手に取って眺めていると言う。「これまでを振り返ってみると、親の姿を見て育ったせいか、あのときの父と同じことをしている自分がいる」と笑う。

「千歳写友会」は、写真技術の向上発展や会員相互の親睦を図ることを目的として、市内の写真愛好家が集まってできた団体。発足は、平成3年4月1日。今年で25年目を迎えた。

佐々木さんが写友会に入会したのは、平成6年4月1日のこと。「仕事の都合で千歳に移り住んで数年が経ったある日、普段から利用していた写真店の店長から『写友会という団体があるので行ってみたら』と勧められたのがきっかけ」と話す。

平成27年には代表に就任。「責任が重くなったが、みんなが協力してくれるのでありがたい」と口にする。

写友会は、現在、会員8人で毎月1回程度、報告会の開催や年数回、写真展示などの活動を行っている。

報告会は、それぞれが撮影した写真を持ち寄って、みんなで評価し合ったりレイアウトなどのアドバイスをしている。

また、写真展示は、8月に市役所1階市民ロビーで「千歳写友会写真展」を開催したほか、11月3日～5日に北ガス文化ホール（市民文化センター）で開催される「チトセ市民芸術祭2016総合作品展」や千歳・恵庭・北広島の3市で持ち回り開催している「石狩管内郷土芸術祭（展示部門）Aブロック」（平成28年は、12月3日～4日に恵庭市の市民会館で開催）に出展する予定。

「各会場には、会員が撮影した思い入れのある作品を展示しますので、皆さんもお気軽にお立ち寄りください」と話してくれました。